

## 受け手による犯罪報道への評価（４）

著者	大谷 奈緒子, 四方 由美, 北出 真紀恵, 福田 朋実
著者別名	Naoko OTANI, Yumi SHIKATA, Makie KITADE, Tomomi FUKUDA
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	58
号	1
ページ	69-82
発行年	2020-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00012242/">http://id.nii.ac.jp/1060/00012242/</a>

## 受け手による犯罪報道への評価（４）<sup>1</sup>

### Audience Evaluation of Criminal Reports（４）

大谷奈緒子	Naoko OTANI
四方 由美*	Yumi SHIKATA
北出真紀恵**	Makie KITADE
福田 朋実***	Tomomi FUKUDA

#### 1. はじめに

本稿は、インターネット時代の事件報道と社会不安の関連について、培養分析のアプローチから検討を行ったものである。「受け手による犯罪報道への評価（２）」（大谷奈緒子ら2019b）において、新聞、テレビ、インターネットニュースの利用別に、人びとの報道に対する意見について検討した結果、新聞を長時間読んでいるほど「社会全体の治安悪化を感じている」という結果を得たことに着眼し、研究を進めた。

人びとの治安に対する意識については、犯罪情勢が一定の改善傾向にあるにもかかわらず治安が悪化していると認識する人の割合が増加していることが指摘されてきた（阪口祐介2008：62）。近年の刑法犯認知件数の減少に合わせて、治安悪化を認識する人の割合も減少傾向にあるが、2017年の内閣府の調査においても、「ここ10年で日本の治安はよくなったと思うか」に、回答者の約60.8%が「悪くなったと思う」（「どちらかといえば悪くなったと思う」を含む）と答えており（内閣府2017：5）<sup>2</sup>、依然として、人びとの主観的現実と統計などで示される現実にズレが生じていることが指摘される（四方由美2020）。このように犯罪が減少しているにもかかわらず治安悪化を感じてしまう状況は、浜井浩一・芹沢一也（2006）のいう「犯罪不安社会」といえる。

これまで、筆者らは、1）報道内容の数量的分析、2）報道の受け手への調査、3）報道の送り手

---

\* 四方由美 宮崎公立大学、\*\* 北出真紀恵 東海学園大学、

\*\*\* 福田朋実 宮崎公立大学、東洋大学現代社会総合研究所

1 本研究は2016年～2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（研究代表者 四方由美）、研究課題「犯罪報道におけるジェンダー問題に関する実証的研究」の研究成果の一部を発表するものである。本研究の構成員は、共著者の他に、国広陽子（武蔵大学）、小川祐喜子（東洋大学）。

2 2012年調査では、「悪くなったと思う」（「どちらかといえば悪くなったと思う」を含む）と回答したのは81.2%（内閣府2012：2）。

調査の3つのアプローチから犯罪報道に関する実証的研究を進めてきた。このうち2) 報道の受け手への調査については、「マスコミ報道についての意識調査」(2018年5月)<sup>3</sup>のデータを用いて、すでにいくつかの研究成果を公表している(大谷ら2019a、2019b、2020)。本稿も同調査のデータから「メディア接触」「犯罪への不安感」「過去1年間の被害の実際」の部分を用いて、犯罪への不安感にメディア利用がどのように関与しているか、培養分析を試みる。

## 2. メディアと犯罪不安

本稿の分析視点であるメディアと犯罪不安の関連性については、G. ガーブナーが提起した「培養理論」において注目された。ガーブナーは、「メディア内容は社会の文化変動の指標になりうる」と考え、文化指標研究に取り組む中で、とりわけテレビによる培養効果を検証する研究を行った(竹下俊郎2008: 55)。文化指標研究は、①テレビ内容が制作されるまでの過程に着目し、制作過程中的の圧力や規程因について調べる「制度過程分析 (institutional process analysis)」、②テレビのメッセージに現れるイメージ、事実、価値、教訓などの支配的、集会的なパターンを調べる「メッセージ・システム分析 (message system analysis)」、③テレビのメッセージが、社会的現実に対する受け手の認識にどのような独自の影響をもたらしているかを調べる「培養分析 (cultivation analysis)」の3つの領域から構成される。竹下は、ガーブナーらの文化指標研究を伝統的なマス・コミュニケーション研究の分類に当てはめると、それぞれ「送り手分析」、「内容分析」、「受け手分析」に相当すると述べている(竹下2008: 56)。

ガーブナーは、テレビに映し出された暴力とそれらが人びとに及ぼす影響の検証のために、対象番組の体系的な内容分析を行い、さらに、近隣の犯罪に対して抱く人びとの不安をテレビがどれだけ誇張するか注目した受け手調査を行った(Gerbner & Gross 1976)。まずアメリカのテレビドラマを対象にした体系的な内容分析から、暴力が描かれる割合や主要な登場人物が暴力行為に関わる割合、加害者あるいは被害者になる人物の属性にみられる傾向といった暴力描写のパターンが明らかにされた。そして、受け手調査から、テレビを長時間視聴する人は短時間視聴する人に比べて、実際の暴力に遭遇するかもしれないと予想していること、暴力に対して過度の不安を持っていることが示された。つまり、メディア接触の時間が長い人ほどテレビ世界に似た形で現実を認識するという、メディア接触と受け手の暴力に対する認識との関係性が指摘されたといえる。加えてガーブナーは、人びとがテレビ世界での暴力の危険性を過大評価することが、現実世界での対人不信感や疎外感の強化といった、

---

3 本調査は、調査会社マクロミルのウェブサイト上において、モニター登録している首都圏50キロ圏内の20歳以上79歳以下の男女を対象に実施した。調査対象者の内訳は、男性、女性それぞれ20歳代が83人、30歳代が83人、40歳代が84人、50歳代が84人、60歳代が83人、70歳代が83人(男性: 500人、女性: 500人、合計1,000人)である。調査の項目は、「メディア接触」「基本属性」「犯罪報道に対する認識と被害経験」「マスコミやインターネットに対する意見」「殺人事件の報道についての意見」「幼児虐待事件についての意見」「性犯罪事件についての意見」などである(調査概要については大谷ら2019aを参照)。

人びとの意識のより深いレベルにも影響を及ぼす点にも触れ、メディアは、人びとが現実を認識する際に、表層的な知覚レベルにとどまらず、意識のより深いレベルにも波及すると指摘している（竹下2008：59）。

ガーブナーの「培養理論」は、その後様々な研究者によって検証され、分析手法を援用した研究も多く積み上げられている<sup>4</sup>。デニス・マクウェール（2005＝2010）は、培養効果はテレビ番組が商業化され、多様化の程度が低いアメリカで生じやすいと述べる（マクウェール2005＝2010：652）。また、マクウェールは、アメリカ以外の国でも多くの培養分析を含む文化指標研究が行われているが、そこで得られたデータは現段階では様々であり、培養効果を裏付けるデータが得られないものもあれば、若者のテレビ経験の長期的変化に関しては、培養仮説を支持する調査結果が多数あるというように、「特定の微妙な問題を扱う研究にとって培養理論は力になるようである」とする（マクウェール2005＝2010：653）。

ガーブナーの研究視点を援用するかたちで受け手調査を実施し、メディア接触と人びとの犯罪不安の関連性の明確化を試みた事例に、阪口（2008）や大谷ら（2016）の研究がある。これらの研究は、全体的には、メディア接触が犯罪不安を高めないことを明らかにした。ただし、属性や犯罪被害経験の有無<sup>5</sup>、自分以外の重要な他者に対する犯罪被害の不安、犯罪の内容<sup>6</sup>（「振り込め詐欺」等の身近な犯罪か、「凶悪犯罪」といった自分と距離のある犯罪か）によっては、部分的にメディア接触と人びとの犯罪不安との関連性が確認されている。

他方で、ガーブナーは、培養の効果は特にテレビにおいて顕著に見られるとしてきたが、現況では、新聞、ラジオ、雑誌、テレビに加えてインターネットという新たなメディアが加わっている。本稿では、既存のメディアにインターネットという新たなメディアを加えて、それらの接触状況と犯罪不安との関連についても明らかにしたい。

### 3. 犯罪報道における培養分析

今回の調査研究では犯罪不安について把握するために、日常生活に潜む軽微な犯罪から重大犯罪ま

---

4 それらには、暴力や犯罪への培養効果だけでなく、結婚への期待に対する培養効果といったものもある（Segrin and Nabi 2002）。

5 阪口は、①本人が犯罪被害経験者では、新聞の地方欄の接触が他者犯罪不安を高めること、②他者が犯罪被害経験者では、全国ニュースの接触が他者犯罪不安を高めること、③子供をもつ親の場合、全国ニュースの接触が他者犯罪不安を高めること、④配偶者を持つ男性の場合、全国ニュースの接触が他者犯罪不安を高めること、という知見を得ている（阪口2008：70）。

6 大谷らは、新聞の閲読時間が長い人ほど犯罪不安が低く、かつ、テレビの視聴時間が長い人ほど犯罪不安が高まるという結果を得ている。また、女性や18歳未満の家族がいる場合といった、一部の個人属性と犯罪被害に対する不安において関連性が見られたことから、「日常で感じる犯罪不安が個人属性によって異なること」「個人属性による犯罪との距離感も、メディア接触と同じく、人びとの犯罪不安を増す要因」になる可能性を指摘した（大谷ら2016）。

で15項目を用意した。具体的には、「a 暴行や傷害などの暴力的な犯罪にあう」「b 自宅にどろぼう(空き巣など)に入られる」「c ひったくりにあう」「d すりや置き引きなどの窃盗にあう」「e 自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりする」「f 盗撮の被害にあう」「g 下着泥棒の被害にあう」「h 不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」「i 痴漢にあう」「j 自宅や敷地内に無断で侵入される」「k ストーカー被害にあう」「l インターネットを介した犯罪の被害にあう」「m AV出演を強要されるなどの被害に遭う」「n 性暴力被害(強姦など)にあう」「o 凶悪犯罪(殺人、放火、強盗)に巻き込まれる」である。

この15項目について犯罪への不安と被害の経験を調査対象者に回答してもらい、メディア接触との関連性を検討することで、メディアと犯罪不安に関する培養について検証した。

### (1) 人びとの犯罪への不安感

まず、人びとの犯罪不安感の実際についてまとめる。15項目の犯罪について、「あなたは日ごろ、あなた自身や家族の方が犯罪被害にあうのはないかという不安を感じることがありますか。」と尋ね、「非常に不安」「かなり不安」「どちらともいえない」「やや不安」「不安はない」の5尺度で回答してもらった。表1はその結果をまとめたものである。「不安がある」は「非常に不安」と「かなり不安」、「不安はない」は「やや不安」と「不安はない」を合わせた割合であり、平均値は「非常に不安」に-2点、「かなり不安」に-1点、「どちらともいえない」に0点、「やや不安」に1点、「不安はない」に2点を与え、平均スコアを算出したものである。平均スコアが低いほど不安感が強いことを示す。なお表1は、不安感が強い順に犯罪項目を並び替えている(表1参照)。

表1 犯罪への不安感

	不安がある	どちらでもない	不安はない	平均値	標準偏差
l インターネットを介した犯罪の被害にあう	37.7	26.7	35.6	0.0060	1.20225
b 自宅にどろぼう(空き巣など)に入られる	34.6	26.4	39.0	0.0590	1.13261
c ひったくりにあう	32.7	30.0	37.3	0.0810	1.11789
o 凶悪犯罪(殺人、放火、強盗)に巻き込まれる	31.2	30.7	38.1	0.0990	1.14914
d すりや置き引きなどの窃盗にあう	32.1	29.0	38.9	0.1100	1.09412
a 暴行や傷害などの暴力的な犯罪にあう	30.8	30.1	39.1	0.1240	1.09992
e 自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりする	29.6	29.9	40.5	0.2090	1.19195
h 不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする	28.2	29.2	42.6	0.2620	1.19950
j 自宅や敷地内に無断で侵入される	29.8	24.3	45.9	0.2700	1.25087
f 盗撮の被害にあう	21.0	34.2	44.8	0.4550	1.18970
k ストーカー被害にあう	18.9	30.0	51.1	0.6070	1.22966
i 痴漢にあう	18.9	30.7	50.4	0.6270	1.24476
n 性暴力被害(強姦など)にあう	16.1	25.4	58.5	0.8080	1.22419
g 下着泥棒の被害にあう	10.4	31.0	58.6	0.9290	1.13280
m AV出演を強要されるなどの被害に遭う	9.7	21.8	68.5	1.1570	1.14090

注1) 「不安がある」は「非常に不安」と「かなり不安」、「不安はない」は「やや不安」と「不安はない」を合わせた割合。

注2) 平均値は、「非常に不安」に-2点、「かなり不安」に-1点、「どちらともいえない」に0点、「やや不安」に1点、「不安はない」に2点を与え、平均スコアを算出した。

表２ 性別 犯罪への不安感（a～mのうち“不安はない”回答率が高い５項目を抜粋）

性別		g 下着泥棒の被害 にあう	i 痴漢にあう	k ストーカー被害 にあう	m AV出演を強要 されるなどの被害に 遭う	n 性暴力被害（強 姦など）にあう
全体 (n=1000)	平均値	0.9290	0.6270	0.6070	1.1570	0.8080
	標準偏差	1.13280	1.24476	1.22966	1.14090	1.22419
男性 (n=500)	平均値	1.0420	0.9580	0.8180	1.1800	1.0200
	標準偏差	1.13438	1.20130	1.20822	1.11449	1.18761
女性 (n=500)	平均値	0.8160	0.2960	0.3960	1.1340	0.5960
	標準偏差	1.12101	1.19969	1.21579	1.16738	1.22466

注）平均値は、「非常に不安」に２点、「かなり不安」に１点、「どちらともいえない」に０点、「やや不安」に１点、「不安はない」に２点を与え、平均スコアを算出した。

犯罪に巻き込まれる不安を感じている項目は、「l インターネットを介した犯罪の被害にあう」が0.006スコア、「b 自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」が0.059スコア、「c ひったくりにあう」が0.081スコア、「o 凶悪犯罪（殺人、放火、強盗）に巻き込まれる」が0.099スコアである。l、b、cについては日常生活に潜む犯罪であるが、他方、oは凶悪犯罪であり、人びとは凶悪犯罪に巻き込まれる不安感も強いことがわかる。

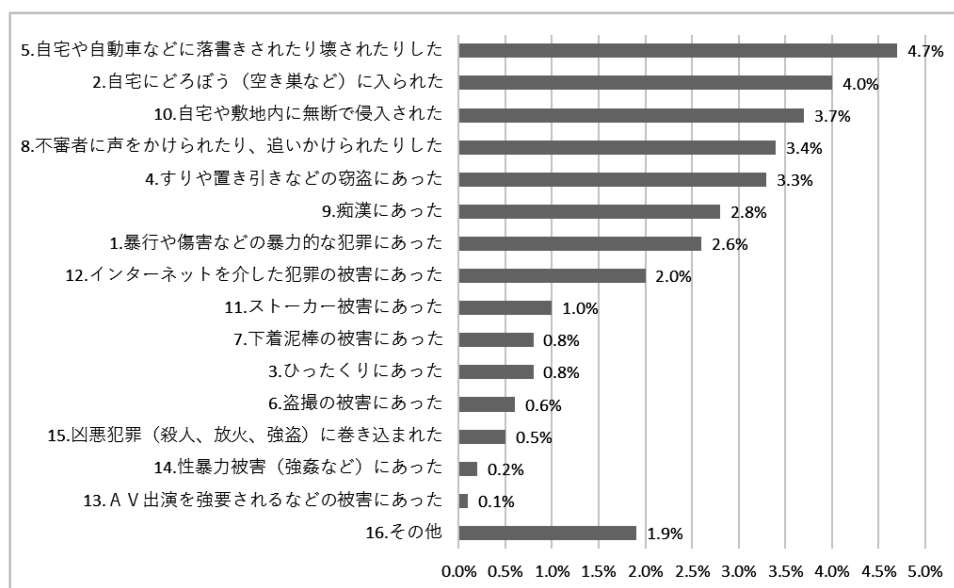
“不安がない”の回答率が５割を超えている項目としてあげられるのは、割合が高い順に「m AV出演を強要されるなどの被害に遭う」「g 下着泥棒の被害にあう」「n 性暴力被害（強姦など）にあう」「i 痴漢にあう」「k ストーカー被害にあう」である。表２はこれら５項目を抜粋し、性別にみたものである。全体のスコアでみると“不安がない”割合が高く、平均スコアが低い項目であるが、性差によって不安感の異なる項目といえ、なかでも「n 性暴力被害（強姦など）にあう」「i 痴漢にあう」「k ストーカー被害にあう」は、特に性差による違いが確認できる（表２参照）。

## （２）人びとの犯罪被害の実際

以下では、実際の被害の状況についてまとめる。設問「あなたご自身や家族の方で、過去１年間に、以下の犯罪被害にあわれたことがありますか。」について、該当する犯罪項目を複数回答してもらった。回答選択肢の犯罪項目は前掲の15項目に、「16.その他」と「17.過去１年間に被害にあったことはない」を加えた17項目である。図１は過去１年間の被害の実際であるが、「17.過去１年間に被害にあったことはない」は80.0%を占め、被害にあった人びとの割合は全体の２割である。

具体的に被害の多い項目をみると、「5.自宅や自動車などに落書きされたり壊されたりした」が4.7%、「2.自宅にどろぼう（空き巣など）に入られた」が4.0%、「10.自宅や敷地内に無断で侵入された」が3.7%である。表１で犯罪不安感が高かった項目の実際の被害状況は、「インターネットを介した犯罪の被害にあった」が2.0%、「10.自宅や敷地内に無断で侵入された」が3.7%、「3.ひったくりにあった」が0.8%、「15.凶悪犯罪（殺人、放火、強盗）に巻き込まれた」が0.5%であった。





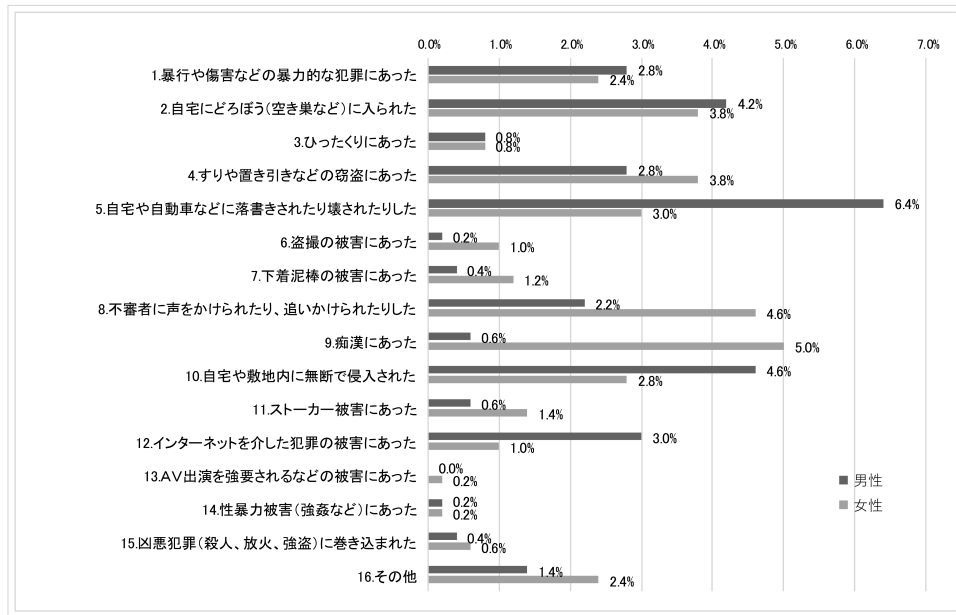
注) 「17. 過去1年間に被害にあったことはない」は80%である。

図1 過去1年間の被害の実際

さらに図2は性別に被害の実際を示したものである。被害の割合が多い順にみると、男性は「5. 自宅や自動車などに落書きされたり壊されたりした」が6.4%、「10. 自宅や敷地内に無断で侵入された」が4.6%、「2. 自宅にどろぼう (空き巣など) に入られた」が4.2%となっている。女性は「9. 痴漢にあった」が5.0%、「8. 不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした」が4.6%、「2. 自宅にどろぼう (空き巣など) に入られた」と「4. すりや置き引きなどの窃盗にあった」がともに3.8%である。このように性別によって犯罪被害の状況は異なっている (図2参照)。表2のような女性の犯罪不安感の現れは、図2のような被害の実態および、被害に遭いやすい環境に置かれていることが影響しているといえよう。

このように、犯罪不安感と実際の被害の状況は異なる。犯罪不安感を構成する要因は、調査回答者の属性、家庭や職場などの環境、犯罪被害の経験、そのほか付随条件によることは明らかであるが、他方で、人びとの現実認識は、直接経験する現実とメディアを介して構成される主観的現実とで構成されており、マス・メディアの犯罪報道のあり方が人びとの内部に再構成される社会や犯罪の姿に与える影響は明らかである。犯罪報道のあり方については、四方ら (2018、2019) や大谷ら (2015、2016、2017) による研究で分析が進んでいる。また、受け手の犯罪報道への意見や評価については、一部をすでにまとめたとおりである (大谷ら2019 a、2019 b、2020)。

本稿はメディアによる受け手の培養分析の視座から犯罪報道について検討するものである。マス・メディアと犯罪不安感の培養の関連性についてはすでに検討したが (大谷ら2016)、インターネットニュースへの効果についての検討が欠けている。そのため本稿では、インターネット時代の犯罪報道と受け手の培養の効果についても考察を行う。



注) 「17. 過去1年間に被害にあったことはない」の回答は、男性が81.8%、女性が78.2%である。

図2 性別 過去1年間の被害の実際

### (3) メディア接触と犯罪不安感

#### ① 分析の概要

「受け手による犯罪報道の評価（２）」（大谷ら2019 a）においてメディア利用時間をカテゴリー化した。「受け手による犯罪報道の評価（３）」（大谷ら2019 b）においてもこのカテゴリーを採用して分析を実施しており、本稿でも共通のメディア利用時間のカテゴリーとして採用していくこととする。カテゴリーについては次のとおりである。新聞は「30分未満」「30分～1時間未満」「1時間以上」「読まない」の4カテゴリー、テレビは「2時間未満」「2時間～4時間未満」「4時間以上」「見ない」の4カテゴリー、インターネットニュースは「30分未満」「30分～1時間未満」「1時間～2時間未満」「2時間以上」「見ない」の5カテゴリーに分類した。

犯罪不安感については、15項目のうち不安感が強いものを分析対象として抽出した。具体的には、全体的に不安感が強い「1 インターネットを介した犯罪の被害にあう」「b 自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」「c ひったくりにあう」「o 凶悪犯罪（殺人、放火、強盗）に巻き込まれる」に、女性で不安感が強い「h 不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする」「i 痴漢にあう」を加え、合わせて6項目とした。

#### ② 新聞の閲読時間と犯罪不安感

各カテゴリー別に“不安がある”“どちらともいえない”“不安はない”の割合について確認をしたところ、「i 痴漢にあう」を除く5項目において、新聞閲読時間が長い「1時間以上」で“不安がある”の回答が最も多い結果となった。そのうち「c ひったくりにあう」「o 凶悪犯罪（殺人、



表3 新聞閲読時間別 犯罪への不安感 (平均スコア)

		b 巣など 自宅に どろぼう （空き 巣など） に入られる	c ひったくり にあう	h 不審者に 声をかけられ たり、追いか けられたりす る	i 痴漢にあう	l インターネッ トを介した 犯罪の被害に あう	o 凶悪犯罪（殺 人、放火、強 盗）に巻き込 まれる
全体	度数	0.0590	0.0810	0.2620	0.6270	0.0060	0.0990
(n=1000)	標準偏差	1.13261	1.11789	1.19950	1.24476	1.20225	1.14914
読まない	平均値	0.0663	0.1222	0.2070	0.6356	0.0663	0.1615
(n=483)	標準偏差	1.13221	1.10806	1.24349	1.24896	1.23728	1.13544
30分未満	平均値	0.0237	0.0500	0.3079	0.6211	-0.0500	0.0474
(n=380)	標準偏差	1.13331	1.11603	1.14741	1.23433	1.14174	1.17263
30分-1時間未満	平均値	0.2222	0.0463	0.3981	0.5833	0.0278	0.0278
(n=108)	標準偏差	1.17078	1.16318	1.14337	1.28343	1.22633	1.13942
1時間以上	平均値	-0.2069	-0.0690	0.0690	0.7241	-0.3448	0.0000
(n=29)	標準偏差	0.94034	1.16285	1.30742	1.22172	1.26140	1.10195

放火、強盗）に巻き込まれる」については「不安はない」の回答もカテゴリー間で最も多くなっていることから、cとoについては、「1時間以上」の層で不安感が拮抗しているといえる。

次に平均スコアを確認したところ、「1時間以上」の平均スコアはiを除く5項目でスコアが低いことがわかる。そのうち「b 自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」「c ひったくりにあう」「l インターネットを介した犯罪の被害にあう」の3項目ではマイナス・スコアを示していることから、不安感が一層強いことが窺える。「c ひったくりにあう」と「o 凶悪犯罪（殺人、放火、強盗）に巻き込まれる」は、新聞閲読時間の長さに従って不安感が強くなる傾向にあることから、6項目の中でも犯罪報道の影響が考えられる（表3参照）。

### ③ テレビの視聴時間と犯罪不安感

テレビは視聴時間と不安感の間に一定の関連性はみられない。各カテゴリー別に「不安がある」「どちらともいえない」「不安はない」の割合についてみたところ、長時間視聴者ほど不安感が比例して高くなる項目は「b 自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」「o 凶悪犯罪（殺人、放火、強盗）に巻き込まれる」で、これらについてはテレビ視聴時間と不安感の間に関連性が考えられる。他方「i 痴漢にあう」については、短時間視聴者ほど不安感が高まる傾向にあり、テレビ視聴時間以外の要因によることが明らかである。

これについて表4の平均スコアで詳しくみてみる。網掛けのセルが最も不安感が高いことを示している。bとoは視聴時間が長くなるにつれて不安感が強くなる傾向にあるが、その他の項目について視聴時間と不安感の関連は確認できない（表4参照）。

ここでのテレビの視聴時間はニュース番組の視聴時間を示すものではないため、ふだん週1回以上みる番組として、「ニュースウォッチ9」（NHK）、「NEWS ZERO」（日本テレビ）、「報道ステーション

表４ テレビ視聴時間別 犯罪への不安感（平均スコア）

		b 自宅にしろぼう（空き 巣など）に入られる	c ひったくりにあう	h 不審者に声をかけら れたり、追いかけられたり する	i 痴漢にあう	l インターネットを介 した犯罪の被害にあう	o 凶悪犯罪（殺人、放火 強盗）に巻き込まれる
全体 (n=1000)	平均値	0.0590	0.0810	0.2620	0.6270	0.0060	0.0990
	標準偏差	1.13261	1.11789	1.19950	1.24476	1.20225	1.14914
見ない (n=60)	平均値	0.1667	0.2000	0.3500	0.8167	0.3167	0.3833
	標準偏差	1.18130	1.13197	1.24635	1.26881	1.24181	1.19450
2時間未満 (n=451)	平均値	0.1064	0.1596	0.2284	0.5809	0.0022	0.1375
	標準偏差	1.14977	1.09798	1.19766	1.25060	1.18039	1.11503
2時間～4時間未満 (n=331)	平均値	0.0302	-0.0544	0.2598	0.6163	-0.0453	0.0393
	標準偏差	1.10330	1.10237	1.18021	1.24106	1.21894	1.15796
4時間以上 (n=158)	平均値	-0.0570	0.0949	0.3291	0.7089	0.0063	0.0063
	標準偏差	1.12439	1.18261	1.23352	1.22762	1.20771	1.19711

表５ テレビのニュース番組視聴者の犯罪への不安感（平均スコア）

		b 自宅にしろぼう（空き 巣など）に入られる	c ひったくりにあう	h 不審者に声をかけられ たり、追いかけられたり する	i 痴漢にあう	l インターネットを介した 犯罪の被害にあう	o 凶悪犯罪（殺人、放火 強盗）に巻き込まれる
全体 (n=1000)	平均値	0.0590	0.0810	0.2620	0.6270	0.0060	0.0990
	標準偏差	1.13261	1.11789	1.19950	1.24476	1.20225	1.14914
ニュース視聴者全体 (n=607)	平均値	0.0445	0.0445	0.2652	0.5799	-0.0708	0.0461
	標準偏差	1.15026	1.12707	1.17755	1.25986	1.19401	1.16375
2時間未満 (n=253)	平均値	0.0593	0.0632	0.1700	0.4308	-0.1383	0.0474
	標準偏差	1.19873	1.09651	1.16103	1.27870	1.15153	1.13290
2時間～4時間未満 (n=232)	平均値	0.1034	-0.0043	0.3276	0.6853	-0.0517	0.0819
	標準偏差	1.11564	1.12622	1.15302	1.23097	1.22276	1.16857
4時間以上 (n=122)	平均値	-0.0984	0.0984	0.3443	0.6885	0.0328	-0.0246
	標準偏差	1.10902	1.19510	1.25158	1.25364	1.22599	1.22281

ン」（テレビ朝日）、「NEWS23」（TBS）、「FNNプライムニュースα」（フジテレビ）をあげた人びとの不安感を抽出した。回答率（複数回答）は、「ニュースウオッチ9」が44.2%、「NEWS ZERO」が42.2%、「報道ステーション」が58.8%、「NEWS23」が20.8%、「FNNプライムニュースα」が8.6%であり、ニュース番組を一つでも選択したのは607人である。表５はテレビのニュース番組視聴者の犯罪への不安感を示している。わずかではあるがテレビのニュース番組を見ている層は全体の平均ス

コアより低く、不安感が強いことがわかる。ただし、テレビのニュース番組を見ている人 (n=607) をテレビの視聴時間別<sup>7</sup>にみたところ、視聴時間の長短と不安感の間に関連性は認められず、ニュース番組視聴者においてテレビの視聴時間が長くなると不安感が強まるというような関連性は確認できない (表5参照)。

#### ④ インターネットニュースの利用時間と犯罪不安感

インターネットニュースの利用時間と不安感については、6項目すべてにおいて利用時間が長い「2時間以上」で“不安がある”の割合が最も高くなっている。そのうち、「c ひったくりにあう」「i 痴漢にあう」「o 凶悪犯罪 (殺人、放火、強盗) に巻き込まれる」の3項目では、利用時間が長くなるにしたがって“不安がある”の割合が増えている。

平均スコアを確認したところ、今回の分析対象の3メディアの中で最も不安感を醸成しているのはインターネットニュースの利用時間であることがわかる。全体的に不安感が強い項目として抽出した4つの項目「b 自宅にどろぼう (空き巣など) に入られる」「c ひったくりにあう」「l インターネットを介した犯罪の被害にあう」「o 凶悪犯罪 (殺人、放火、強盗) に巻き込まれる」のすべてにおいて、利用時間が長くなるほど不安感が強くなり、「2時間以上」になるとすべての項目でマイナス・スコアを示していることがわかる (利用しないは除く) (表6参照)。

表6 インターネットニュース利用別 犯罪への不安感 (平均スコア)

		ど b 自宅にどろぼう (空き巣など) に入られる	c ひったくりにあう	り、 h 不審者に声をかけられた り、追いかけられたりする	i 痴漢にあう	犯罪の被害にあう l インターネットを介した	盗に巻き込まれる o 凶悪犯罪 (殺人、放火、強盗)
全体	平均値	0.0590	0.0810	0.2620	0.6270	0.0060	0.0990
	(n=1000) 標準偏差	1.13261	1.11789	1.19950	1.24476	1.20225	1.14914
利用しない	平均値	0.0769	0.1385	0.5538	0.7846	0.1846	0.3692
	(n=65) 標準偏差	1.13616	1.08796	1.07574	1.11092	1.22337	1.11200
30分未満	平均値	0.1574	0.1294	0.2614	0.6244	0.0761	0.1904
	(n=394) 標準偏差	1.06559	1.10100	1.14371	1.21735	1.16098	1.09907
30分~1時間未満	平均値	0.0731	0.1229	0.3189	0.7043	-0.0166	0.0565
	(n=301) 標準偏差	1.19219	1.12909	1.27982	1.28411	1.24488	1.20283
1時間~2時間未満	平均値	0.0199	0.0331	0.1258	0.5232	-0.1192	-0.0066
	(n=151) 標準偏差	1.15164	1.12201	1.19613	1.26930	1.16577	1.15756
2時間以上	平均値	-0.3708	-0.2360	0.0899	0.4382	-0.1461	-0.1798
	(n=89) 標準偏差	1.10147	1.13840	1.22140	1.26989	1.26626	1.13380

7 テレビのニュース番組の視聴時間を示すものではない。

#### （４）分析のまとめ

人びとの生活にインターネットが普及・浸透し、情報入手の方法は多様化している。今回の調査回答者の各メディアの利用状況は次のとおりである。ふだん「新聞を読む」と回答した53.9%（n=539）のうち、「平日は新聞を読まない」は4.1%を占めており、平日新聞を読んでいる人は全体の5割に満たない。テレビの平日の視聴者率は94.0%（n=940）であるが、具体的な報道番組などの情報番組名<sup>8</sup>を提示し、ふだん視聴している番組を複数回答してもらったところ、これらの番組を視聴している人は全体の71.9%（n=719）となる。インターネットのニュースサイトの平日の利用者は93.5%（n=935）である<sup>9</sup>。さらに本稿では取り上げていないが、ふだん週刊誌を読んでいる人は17.2%（n=172）である。この結果から、現代の多くの受け手がインターネットのニュースサイトからニュースを入手していることは明らかである。

このようなメディア接触状況が人びとの犯罪への不安感の培養にどのように作用しているのか、新聞、テレビ、インターネットニュースで共通してあげられたのは「凶悪犯罪に巻き込まれる」不安の培養である。いずれのメディアでも犯罪項目によっては利用時間が長くなるにしたがって不安感が強くなるものがあるが、総合的にみると新聞やテレビでは、利用時間が長くなるほど不安感が高まるといふ現象はあまり認められない。現代ではインターネットニュースが人びとの犯罪不安感を培養するメディアとして作用しているといえる。

### 4. おわりに

本稿では人びとの犯罪への不安感にメディア利用がどのように関与しているか、培養分析を試みた。人びとの犯罪不安感と実際の被害の状況にはズレが確認され、その原因としては属性などメディア以外の要因もあげられるが、新聞、テレビ、インターネットニュースのいずれのメディアでも、犯罪の項目によっては、利用時間が長くなるにしたがって人びとの不安感が強くなることが確認できた。なかでも直接経験することが少ない「凶悪犯罪に巻き込まれる」不安の培養については、特に、メディアの影響が大きいと考えられる。今回の知見からは、メディアのなかでもインターネットニュースは、人びとの犯罪不安感を広く培養する効果があるといえよう。ただし、遠藤薫（2010）は、「人びとの問題意識は、メディア間の複雑で錯綜した相互作用（これを「間メディア性」とよぶ）のなかで形成されると考えられる」と指摘しており、人びとの犯罪への不安感が特定のメディアで培養されるわけ

8 具体的な番組名は以下のとおりである。「情報ライブ ミヤネ屋」（日本テレビ）、「ワイド! スクランブル（テレビ朝日）」、「ひるおび!」（TBS）、「バイキング」（フジテレビ）、「直撃LIVE グッディ!」（フジテレビ）、「ニュースウオッチ9」（NHK）、「NEWS ZERO」（日本テレビ）、「報道ステーション」（テレビ朝日）、「NEWS23」（TBS）、「FNN プライムニュースα」（フジテレビ）。

9 調査はインターネットモニターを調査対象としているため、属性によるインターネット利用について配慮する必要があるが、現在のインターネット普及率や調査対象者は20代から70代まで均等に抽出していることから、現代の人びとの情報環境を表しているといえよう。

ではない。

コミュニケーション・メディアとしてのインターネットは人びとの情報行動にも大きな影響を与えている。インターネットのオンラインコミュニティに関する研究では、コミュニティ内での信頼感の醸成や、ネット世論の形成に寄与する機能などの研究が進んでいる（たとえば小林哲郎・池田健一 2006）。本稿の知見では、インターネットニュースの長時間利用者ほど犯罪への不安感が高まる傾向が確認され、一定の培養が確認されたといえる。インターネットニュースの特徴のひとつは、利用者のニーズに応じた情報に、好きな時に好きなだけアクセスできるということである。これに加え、他者とニュースや不安を共有したり、詳細な情報や類似の犯罪報道を閲覧したりするなど、培養の相乗作用が考えられることから、インターネットニュース利用を取り巻く要因の検討も課題となる。

#### 《引用文献》

- 遠藤薫 (2010) 『『ネット世論』という曖昧：＜世論＞、＜小公共圏＞、＜間メディア性＞』『マス・コミュニケーション研究』第77巻：pp.105-126
- 大谷奈緒子・四方由美・川島安博・小川祐喜子・川上孝之 (2015) 「時間・空間フレームにおける犯罪報道研究」『東洋大学社会学部紀要』第53-1号：P.31-46
- 大谷奈緒子・四方由美・川島安博・小川祐喜子 (2016) 「犯罪報道のフレーム分析」『東洋大学社会学部紀要』第53-2号：P.33-46
- 大谷奈緒子・川島安博・小川祐喜子・川上孝之・松本憲始・福田朋実 (2016) 「犯罪報道の評価と犯罪不安感」『東洋大学社会学部紀要』第54-1号：P.57-68
- 大谷奈緒子・四方由美・川島安博・小川祐喜子 (2017) 「犯罪報道のフレーム分析（2）」『東洋大学社会学部紀要』第54-2号：P.51-63
- 大谷奈緒子・四方由美・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2019 a) 「受け手による犯罪報道への評価」『東洋大学社会学部紀要』第56-2号：pp.125-136
- 大谷奈緒子・四方由美・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2019 b) 「受け手による犯罪報道への評価（2）」『東洋大学社会学部紀要』第57-1号：pp.99-115
- 大谷奈緒子・四方由美・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2020) 「受け手による犯罪報道への評価（3）」『東洋大学社会学部紀要』第57-2号：pp.45-57
- 小林哲郎・池田謙一 (2006) 「オンラインゲーム内のコミュニティにおける社会関係資本の醸成：オフライン世界への汎化効果を視野に」『社会心理学研究』第22巻第1号：pp.58-71
- 阪口裕介 (2008) 「メディア接触と犯罪不安：『全国ニュース』と『重要な他者への犯罪不安』の結びつき」『年報人間科学』29-2：pp.61-74
- 四方由美・大谷奈緒子・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2018) 「犯罪報道の共起ネットワーク分析（1）」『宮崎公立大学人文学部紀要』第25巻1号：pp.63-80
- 四方由美・大谷奈緒子・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2019) 「犯罪報道の共起ネットワーク分析（2）」『宮崎公立大学人文学部紀要』第26巻1号：pp.79-92
- 四方由美 (2020) 「女性被害者は本当に多いのか？」石田佐恵子・岡井崇之編『基礎ゼミ メディアスタディーズ』世界思想社：pp.74-83
- 竹下俊郎 (2008) 『増補版 メディアの議題設定機能——マスコミ効果研究における理論と実証』学文社
- デニス・マクウェール (2005=2010) 『マス・コミュニケーション研究』(大石裕監訳 慶應義塾大学出版会)
- 内閣府政府広報室 (2012) 「『治安に関する特別世論調査』の概要」  
<https://survey.gov-online.go.jp/tokubetu/h24/h24-chian.pdf> (2020年8月13日閲覧)
- 内閣府政府広報室 (2017) 「『治安に関する世論調査』の概要」  
<https://survey.gov-online.go.jp/tokubetu/h29/h29-chiang.pdf> (2020年8月13日閲覧)
- 浜井浩一・芹沢一也 (2006) 『犯罪不安社会 誰もが「不審者」？』光文社新書

Gerbner,G.&Gross,L. (1976) "Living with television: The violence profile." *Journal of Communication*,26 (2)

Segrin,C. & Nabi,R.L. (2002) "Does Television viewing cultivate unrealistic expectations about marriage?"  
*Journal of Communication*,52 (2)



【Abstract】

## Audience Evaluation of Criminal Reports ( 4 )

Naoko OTANI  
Yumi SHIKATA  
Makie KITADE  
Tomomi FUKUDA

Our research group has been conducting research on Criminal Reports using three approaches: 1) quantitative analysis of media content, 2) audience research, and 3) report sender research. This paper focuses on 2) audience research in the form of a survey of recipients.

In our previous study (“Audience Evaluation of Criminal Reports (2),” The Bulletin of Faculty of Sociology, Toyo University 57 (1), we examined the opinions of respondents to coverage by newspaper, television, and Internet news usage. We concluded that the more respondents read newspapers, the more anxiety they had regarding current society.

This paper examines news coverage and social anxiety in the Internet age from the perspective of cultivation theory. Our analysis shows a correlation between the length of time spent viewing Internet news and an increase in anxiety about crime. In the Internet age, a certain cultivation analysis has been observed with regard to Internet news as opposed to mass media such as newspapers and television.